

特集 人類対餅!?

窒息を科学する

人類の歴史は、まさに窒息との戦いの歴史です。

ヒトの喉頭はほかの哺乳類に比べて低く、類人猿などと比べても顕著に尾側にあります。乳幼児は例外的に1歳半頃までは喉頭の位置が高く、ミルクを摂取しながら息を吸うことができますが、成長につれて喉頭位置が下がっていき、話ができるようになる頃には窒息のリスクが著明に高まります。その後は死ぬまで、窒息に怯えて生きていくことを強いられるのです。ヒトは、「話す」という機能を手に入れる代わりに、「食事をする」というもっとも基本的な行為の最中に突然死する、窒息という身近で重大なリスクを抱えて生きることになりました。

しかし、ヒトも、窒息という脅威に対していつまでもずっと黙っているわけではありません。1974年に、米国のハイムリック医師が腹部突き上げ法、通称「ハイムリック法」を発表しました。その手技によって窒息が解除されたという症例報告や小規模研究でのポジティブな効果から、ハイムリック法は気道異物による窒息の基本的な解除手技となり、約50年が経過しています。しかし、その効果を支持するエビデンスの質はまだまだ低く、ハイムリック法による胃破裂や脾損傷などの合併症も複数報告されています。また、ハイムリック法の最大の問題点の一つ、高齢者による実施の困難性は解決されておらず、老老介護社会となった現在において、窒息解除のもっとも効果的な方法が何であるかは明らかになっていないのが現実です。

人類と窒息の戦いは、いまだに終わりがみえません。とくに日本は、世界でもっとも高齢化が進んでいるにもかかわらず、窒息リスクが高いもの（例えば、餅）を好んで食べ、窒息リスクが高い風習（例えば、恵方巻き）もある、“戦いの激しい国”です。本誌読者の救急医にとっても、窒息との戦いは日常茶飯事でしょう。だからこそ「窒息」は、しっかりと学び理解すべき、重要なテーマと考えます。

そこで今号では『人類対餅!？ 窒息を科学する』と題し、窒息をとことん深掘りし、考える特集を企画しました。窒息の診療や研究に携わるエキスパートが、窒息の疫学・研究の最前線や、臨床で役立つ窒息解除手技のポイント・エビデンスをまとめる、まさに集大成的な特集です。非常に身近で、でもなかなかしっかり勉強する機会がないであろう窒息について、多くの救急医の先生方に改めて興味をもっていただく、貴重な機会になると信じています。

日本人対餅。人類対窒息。この永年の争いを、私たちの代で終わらせましょう。